

良くなりたいか

ヨハネ五・一〇九

聖書は、生きていく上で大切なものが三つあると教えます。一つは信仰。神を信頼して生きること。二つ目は愛。神の愛に生かされること。その大きな愛に感謝するから私たちは隣人を愛することが出来ます。一、二番目と比べて意外と知られていない三つ目は、希望。人生は思いもよらぬ苦しみが襲うもの。あまりの苦しみに、せつかくの信仰や愛をみつめる目が覆い隠され落胆してしまうことも。そんなとき私たちをもう一度励まし立ち上がらせてくれる、希望。信仰と希望と愛、この三つで私たちの人生は完成します。

希望を失いかけた男が今日聖書に登場します。三八年間病気が治らず、横たわることしかできなかった男。エルサレムの門脇、ベトザタの池では

水が動いたとき一番に飛び込むと病気が治るとの言い伝えを信じて毎日大勢の病人がほとりで待ち構えている。だが、水が動くといつも後から来たものが先に飛び込んでしまい彼一人、取り残される。最初は希望もあったが、三十八年の間に希望は失望に変わっていった。だが、この年の祭りの日イエスはこの男のもとに、上京して真つ先に向かい尋ねた。「良くなりたいか」。良くなりたいに決まってる。はい、良くなりたいたと答えれば……。なのに、彼はそう言わず、代わりに言い訳や愚痴ばかり。希望に向かって正直でいるにはあまりに長い三十八年だったのか。そんな彼にイエスは言う。単刀直入に

「立ち上がれ、床を担いで歩け！」。

池も水も愚痴も言い訳もぜんぶ飛び越えて、イエスは彼の心の最も奥深くに眠る希望に向かって語りかけた。彼は立ち上がり、歩き始めた。希望が、彼の心の中によみがえった。